「令和の伊能大図」

増山雄三

別稿の「日本地図を初めて作った人」で記したように、「伊能忠敬」とその測量隊による計十回にわたる測量の成果は、忠敬死後の一八二一年、伊能図の最終版ともいえる「大日本沿海奥地全図」にまとめられ、それが幕府に献上された。

その完成から、二百年たった節目の年である二〇二一年を前に、現代のコンピューター技術を使って、この伊能図を最良の形で蘇らせようとするプロジェクトの、「令和の伊能大図」が産声を上げたが、それは、半世紀に亘り伊能忠敬研究をしてきた、「令和の伊能大図をつくる会」代表の「渡辺一郎さん」が音頭をとり、「百年や二百年の批判にも耐えるものにしたい」とたて上げたものだ。

この「大日本沿海奥地全図」は、二百十四

枚の「**大図**」と八枚の「**中図**」、それに三枚の「**小図**」からなっていて、忠敬の弟子たちにより幕府に献上された原本は、将軍の「**紅葉山文庫**」に収められたものの、一八七三年に皇居の火災で焼失してしまい、また、伊能家から明治政府に献納された**控図**も、一九二三年の関東大震災で保管先の東京帝国大図書館が焼け、これも失われてしまった。

しかし、大図を模写した伊能図は幾つか残っていて、一つは、明治初期に東北南部から甲信越と静岡東部をカバーした**控図**から模写されたあと、国会図書館に移管された「**国会大図**」という、四十三枚が残っている、

あと一つが、渡辺さんが二〇〇一年に、ワシントンにある「**米国議会図書館**」で発見した二百七枚の「**アメリカ大図**」で、それは、国土地理院前身の旧陸軍測量部門により、明治の初めに**控図**から写されたものが、何らかの径路をへて太平洋を渡ったものだ。

ただこのような「**模写図**」には欠点も少な

くなく、伊能図研究を大きく前進させた「**アメリカ大図**」は、日本列島をほぼ網羅し、地名も比較的克明に記しているものの、風景は無着色で富士山も簡略化され、家並みも黒い点が並ぶのみで、一方、「**国会大図**」も山や街道筋が描かれるが、地形や地名が曖昧だ。

そこで、「**令和の伊能大図**」では、アメリカ大図を基本図としながら、国会大図や十五年前に海上保安庁で発見された「**海保大図**」を参考にし、地名や領主名に道路や側線とともに、湖沼や海岸線を見直し、正確さを期して工夫したものにしている。

それに彩色は、国会大図はもとより、平戸や壱岐それに長崎の一部が美しく記録されている「**平戸大図**」を模して、山の景色も描き直すといい、その作業にはコンピューターを使い、大図の仕上げサイズは、一枚が一畳ほどの原寸大のものになっている。

まずは二年後を目途に、東京周辺から神戸付近までを対象に、大図の約三十五枚を製作

し、約十年かけて全国の大図を揃えたいとしていて、完成のあかつきには、忠敬が測量の旅に出る前に訪れて縁が深い、東京江東区にある「富岡八幡宮」に奉納し、そこの資料館で公開される予定になっている。

令和二年六月